View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tokushima University Institutional Repository

徳島大学　人間科学研究
第21巻（2013）　23－34

シャイネスと被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響

徳永沙智 [1)]　稲畑陽子 [1)]　原田素美礼 [2)]　境　泉洋 [3)]

Effect of shyness sense of acceptance and sense of rejection on social skills

Sachi TOKUNAGA[1)] Yoko INAHATA[1)] Sumire HARADA[2)] Motohiro SAKAI[3)]

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effect of shyness and sense of acceptance and rejection on social skills. Results revealed that subjects who were high shyness indicated lower score than those who were low shyness on the sense of acceptance. It was also found that those who have a low sense of acceptance held lower score than those who have a high sense of acceptance on social skills. Finally, results of this study showed that sense of acceptance and rejection affect the social skills by the intermediary of shyness. However, this study could not indicate the sense of acceptance and rejection as important factor in social skills deficit. Henceforth it is necessary to consider other factors in social skills deficit. In addition, results may be a clue to consider the issue of social skills training for shyness.

KeyWords ; shyness, sense of acceptance, sense of rejection, social skills deficit

[1)] 徳島大学大学院総合科学教育部
Graduate school of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima
[2)] 徳島県精神保健福祉センター
Tokushima prefectural Center for Mental Health and Welfare
[3)] 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

【問題と目的】

ニートやひきこもりなど社会適応が困難である若者のうち，約８割が対人関係に不安を感じているとされている（厚生労働省，2007）．その原因の一つとして対人恐怖が挙げられており，近年では軽症の対人恐怖の増加が指摘されている（安井ら，2010）．このような，青年期に多く見られる，病態水準に満たない対人恐怖傾向はシャイネスと呼ばれ,「対人的な評価に直面したり，あるいはそれを予期したりすることから生じる，対人不安および行動の抑制によって特徴づけられる情動的－行動的症候群」（Leary，1986）と定義されている．また，シャイネスは，学校や就職などの様々な社会的場面において不適応に繋がりやすいとされている（菅原，1998）．

一方で，社会的スキルとは「対人関係を円滑に開始あるいは維持するために，相手に効果的に反応する際に用いる言語的, 非言語的な行動レパートリー」(相川，1996）である．スキルの不足は対人関係の困難や孤独感，抑うつなどにつながるため（相川，2000），求められるスキルを獲得させる社会的スキル訓練（social skills training：SST）が行われている（石井，2006）．

シャイネスを抱える人物は，対人場面を回避することで，適切な対人行動やそうした行動に対する報酬を獲得する機会を失うため，社会的スキルが獲得されにくいという指摘がある（相川，1998）．そこで，シャイネスに対する治療的アプローチは，訓練によって社会的スキルの欠如を解消することを目的に進められている（後藤，2001）．

しかし，シャイネスに対する本邦のSST 適用例では必ずしも訓練の効果が得られていない. SST を効果的に行うには，訓練内容や長期的な効果の持続や般化といった研究課題があり，これは SST 全般に関わる課題でもある（後藤，2001）．後藤は, 特にシャイネスの SST に関して，自己認知やメタ認知などの認知過程を修正することの重要性を指摘している．社会的スキルの欠如に関して，Gresham（1988）の研究では，スキルの欠如を獲得と遂行の有無および妨害反応の有無という２次元によって，４種類に分類している．この中で，シャイネスのような対人不安傾向の強い者は,「スキルを獲得しているが，不安があるためにそれを適切な場面で遂行できない」という実行欠如にもあてはまるといえる．つまり，シャイネス傾向にある者は，適切なスキル自体は既に獲得していても，対人場面への不安と消極性が，それを実行することを抑制している可能性もある．このような問題は，一度獲得したスキルの長期的な持続や般化といった研究課題が残っている，シャイネスの SST 適用において重要であるといえる．このことから，実際に獲得すべきスキルを欠如させているだけでなく，このような社会的スキル実行欠如をさらに高める要因として，シャイネスに関わる認知について検討することは, 自分自身の対人行動に自信を持ち，獲得したスキルを日常生活に般化させ長期間持続させていく一助になるという点において有意義であると考えられる．

対人関係において,「自分が相手にどう思われているか」というメタ知識は重要である（工藤，2007）．例えば,「自分は他者に大切にされている」という認識や情緒である被受容感の低さは，自尊感情

を低下させる（杉山，2002）．さらに，鈴木ら（2007）の研究において，被受容感を十分に感じていない者は，自分の社会的スキルが不適切であると認識していることが示されている．シャイネス傾向にある者は，自己認知のバイアスから「自分は相手からポジティブに見られていない」と推測しやすく，このことが対人行動を抑制するとされている（栗林ら，1995）．鈴木ら（2007）では，質問紙法における社会的スキルの自己認知は，本人が自分の行動をどのように認識しているかを測定したものであり，実際の現実的な行動を直接的に反映したものではないとしている．また，質問紙法によって測定された社会的スキルの自己認知は，必ずしも他者評価と一致しないことがあると指摘されている（平賀，2003）．これらのことから，社会的スキルの自己評定得点は，実際のスキルではなく，あくまで本人の社会的スキルに対する自信を測定している可能性もあると考えられる．これを踏まえると，自尊心との関わりも強い被受容感の不足は，実際の対人行動の抑制を招くだけでなく，特に本人の社会的スキルに対する自信を欠如させることになると考えられる．

また，「他者に疎まれている，ないがしろにされている」といった被拒絶感についても考慮が必要である（杉山・坂本，2006）．シャイネス傾向にある者は，初対面であっても，「相手が自分に抱く認知は非常に否定的なものである」という推測をするなど，自分に対する相手の認知に関して現実とのずれがある（後藤，2001）．さらに，被受容感と被拒絶感は同じ次元であるとみなされることがあるが，杉山ら（2006）は，これらは，それぞれ異なる次元であるとすることが適切な場合があることを指摘している．これを踏まえると，被受容感と被拒絶感は，社会的スキルに対して，それぞれ異なる影響を及ぼしている可能性がある．

これらのことを踏まえて，本研究では，シャイネスと被受容感および被拒絶感が，社会的スキルに与える影響を検討する．社会的スキルの自己評定は対人行動への自信を測定しているものであるという側面を考慮し，スキルの実行欠如に関わる要因を明らかにすることで，シャイネスへの認知的なアプローチやSSTのための新たな知見を得られるものと考えられる．

本研究の仮説は以下の通りである．①シャイネスの高い者は，低い者よりも社会的スキルが低い．②シャイネスの高い者は，低い者よりも被受容感が低い（被拒絶感が高い）．③被受容感が低い（被拒絶感が高い）者は，被受容感が高い（被拒絶感が低い）者よりも社会的スキルが低い．④シャイネスは，被受容感・被拒絶感を介して社会的スキルに影響を与えている．これらの仮説をまとめるとFigure1のようなモデルが想定される．

【方法】

1．調査対象者

A県内の大学生297名を対象として，質問紙調査を行った．このうち，回答に不備のあったものを除く219名(男性65

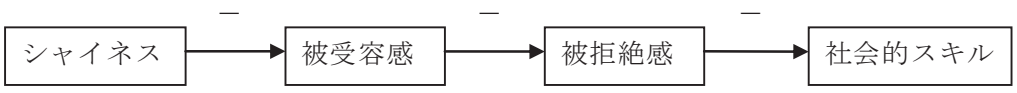


Figure1．シャイネスと被受容感・被拒絶感が社会的スキルに影響を及ぼすと仮定したモデル

名，女性 154 名，有効回答率 73.7%)を分析対象とした. 平均年齢は 19.25 歳(SD＝1.23)であった．欠損値については，尺度の 10%に満たないものには最頻値を代入し，10%以上のものは削除した.

2．調査手続き

講義時間中に質問紙を配布・回収した. 調査時期は 2012 年 11 月下旬であった. 質問紙調査は個人が特定できないよう無記名で行われ，参加は任意であることなど，調査に関する説明を行った上で，回答を求めた.

3．質問紙の構成

① フェイスシート：学部, 学科, 学年, 年齢，性別

② 特性シャイネス尺度（相川，1991）

人格特性としてのシャイネスを測定するものであり，計 16 項目である．項目内容は「私は引っ込み思案である」などであった.「1. 全くあてはまらない」から「5. よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた.

③ 被受容感・被拒絶感尺度（杉山・坂本，2006）

2 因子からなり「被受容感」「被拒絶感」の各 8 項目，計 16 項目である．項目内容は「私はたいてい受け容れられている」「私はよく批判される」などであった.「1. 全くあてはまらない」から「5. よくあてはまる」の 5 件法で回答を求めた.

④ 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）

コミュニケーション・スキルと対人スキルの両側面から社会的スキルを測定するものである．6 因子からなり「関係開始」「解読」「主張性」「感情統制」「関係維持」「記号化」の計 35 項目である．項目内容は「相手とすぐにうちとけられる」などであった.「1.ほとんどあてはまらない」から「4.かなりあてはまる」の 4 件法で回答を求めた.

【結果】

1．各尺度の信頼性

各尺度の内的整合性を確認するため，クロンバックの α 係数を算出した（Table1）. その結果，特性シャイネス尺度（α＝.93），被受容感・被拒絶感尺度の被受容感（α＝.88）および被拒絶感（α＝.86），成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（α＝.91）のいずれにおいても高い内的整合性が確認された.

また, 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の各因子は，関係開始（α＝.92），解読（α＝.85），主張性（α＝.78），関係維持（α＝.62），記号化（α＝.75）において概ね高い内的整合性が確認された．感情統制に関しては, 極端に低い値（α＝.02）となったため，各項目との相関が最も低かった項目 17「感情をあまり面にあらわさないでいられる」を削除し，α＝.75 としたものを分析に使用した.

2．各変数間の相関

各変数間の相関分析の結果を Table2 に示す．ほぼ全ての変数間に有意な相関

Table1　記述統計と*α*係数

	全体（*n*=219）		
	Mean	*SD*	*α*
年齢	19.25	1.23	－
シャイネス	47.75	11.98	.93
被受容感	28.34	4.74	.88
被拒絶感	18.58	5.07	.86
社会的スキル	88.12	13.01	.91
関係開始	19.99	4.91	.92
解読	21.06	3.95	.85
主張性	17.07	3.51	.78
感情統制	7.50	2.03	.75
関係維持	11.66	1.67	.62
記号化	11.05	2.35	.75

が認められた．ただし，感情統制に関しては，被拒絶感，社会的スキル，主張性，関係維持と有意な相関があるものの，それ以外との間には有意な相関が認められなかった．

3. 被受容感・被拒絶感得点による社会的スキルの差　被受容感の総得点について，平均値以上を高群（128 名），平均値以下を低群（91 名）とした．また，被拒絶感の総得点について，平均値以上を高群（112 名），平均値以下を低群（107 名）とした．社会的スキルの総得点および各因子の得点を被受容感・被拒絶感の高群と低群で比較した結果，被受容感においては感情統制を除く全てのスキルとの間に有意差が認められた（社会的スキル：$t(217)=-6.63$，$p<.001$；関係開始：$t(217)=-5.76$，$p<.001$；解読：$t(217)=-3.12$, $p<.01$；主張性：$t(217)=-4.90$, $p<.001$；感情統制：$t(217)=-.29$，*n.s.*；関係維持：$t(217)=-7.02$，$p<.001$；記号化：$t(217)=-7.24$, $p<.001$；Table3）．また，被拒絶感においては，解読と主張性を除く全てのスキルとの間に有意差が認められた（社会的スキル：$t(217)=4.08$, $p<.001$；関係開始：$t(217)=4.21$，$p<.001$；解読：$t(217)=1.81$，*n.s.*；主張性：$t(217)=1.31$，*n.s.*；感情統制：$t(217)=2.75$, $p<.01$；関係維持：$t(217)=6.13$, $p<.001$；記号化：$t(217)=3.35$，$p<.01$；Table4）．

これらの結果から，被受容感が低い（被拒絶感が高い）者は，被受容感が高い（被拒絶感が低い）者よりも社会的スキルが低いことが示された．

4. シャイネスおよび被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響

シャイネスが被受容感と被拒絶感を媒介として社会的スキルに及ぼす影響について検討するため，シャイネス高群，シャイネス低群それぞれにおいて，シャイネスを独立変数，被受容感と被拒絶感を媒介変数，社会的スキルを従属変数としたパス解析を行った．その結果，いずれも，シャイネスおよび被受容感が直接社会的スキルに与える影響を加えたモデルにおいて，最もあてはまりが良かった（Figure2,3）．

高群では，被拒絶感から社会的スキルに至るパス（.21，*n.s.*）を除く全てのパスにおいて有意な推定値が得られた．χ^2 は 5%水準で有意であったが，その他の指標において，ある程度の適合度が得られた（GFI＝.97, AGFI＝.74, CFI＝.96, RMSEA＝.22）．シャイネスから被受容感への影響（－.37，$p<.001$），被受容感から社会的スキルへの影響（.51，$p<.001$），において，それぞれ有意な推定値が得ら

Table2　相関係数

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	シャイネス	1	−.58**	.48**	−.76**	−.89**	−.39**	−.54**	−.05	−.37**	−.57**
2	被受容感		1	−.69**	.64**	.57**	.40**	.44**	.07	.59**	.56**
3	被拒絶感			1	−.42**	−.40**	−.24**	−.20**	−.18**	−.48**	−.35**
4	社会的スキル				1	.83**	.74**	.67**	.16*	.60**	.75**
5	関係開始					1	.45**	.50**	.10	.39**	.63**
6	解読						1	.40**	.07	.52**	.49**
7	主張性							1	−.21*	.27**	.58**
8	感情統制								1	.19**	−.13
9	関係維持									1	.41**
10	記号化										1

*:$p<.05$　**:$p<.01$

Table3　被受容感による社会的スキルの平均値の比較

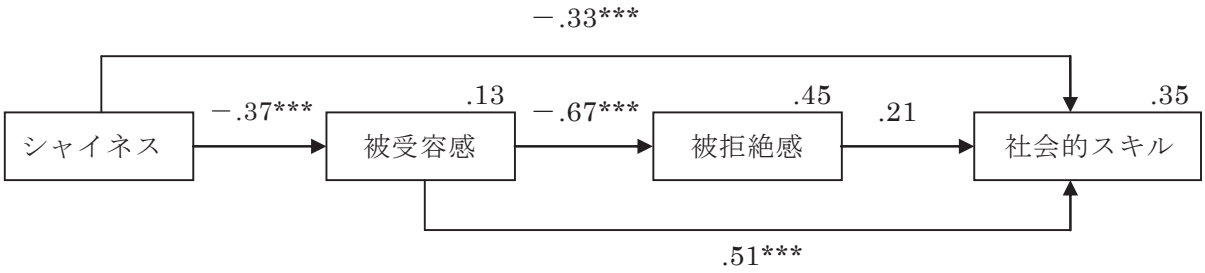
	被受容感高群（n=128）		被受容感低群（n=91）		t値（df=217）
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	
社会的スキル	92.63	12.49	81.79	11.06	−6.63 ***
関係開始	21.49	4.88	17.87	4.16	−5.76 ***
解読	21.75	3.52	20.09	4.35	−3.12 **
主張性	18.00	3.55	15.76	3.05	−4.90 ***
感情統制	7.53	2.05	7.45	2.01	−.29 *n.s.*
関係維持	12.26	1.50	10.80	1.53	−7.02 ***
記号化	11.93	2.16	9.82	2.06	−7.24 ***

**:p < .01　　***:p < .001

Table4　被拒絶感による社会的スキルの平均値の比較

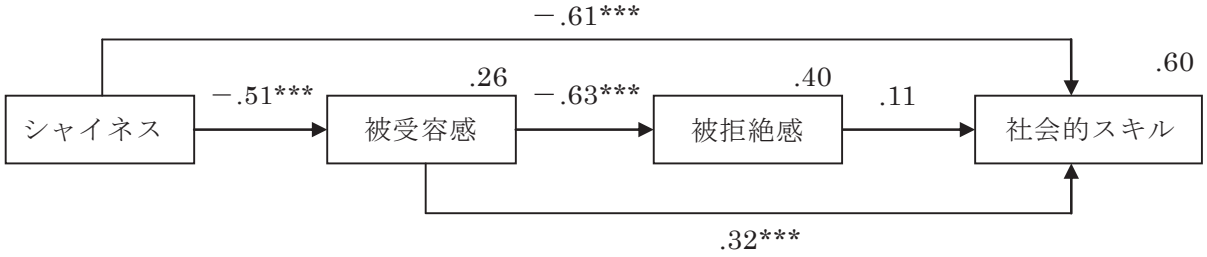
	被拒絶感高群（n=112）		被拒絶感低群（n=107）		t値（df=217）
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	
社会的スキル	84.73	11.51	91.67	13.63	4.08 ***
関係開始	18.67	4.64	21.36	4.84	4.21 ***
解読	20.59	4.15	21.55	3.71	1.81 *n.s.*
主張性	16.77	3.34	17.39	3.70	1.31 *n.s.*
感情統制	7.13	1.92	7.88	2.09	2.75 **
関係維持	11.03	1.49	12.31	1.61	6.13 ***
記号化	10.54	2.28	11.59	2.33	3.35 **

**:p < .01　　***:p < .001



$\chi^2(1)=6.43$，$p=.01$，GFI＝.97，AGFI＝.74，CFI＝.96，RMSEA＝.22

Figure2.　高群におけるシャイネスが被受容感と被拒絶感を媒介として社会的スキルに及ぼす影響



$\chi^2(1)=5.69$，$p=.01$，GFI＝.97，AGFI＝.73，CFI＝.97，RMSEA＝.22

Figure3.　低群におけるシャイネスが被受容感と被拒絶感を媒介として社会的スキルに及ぼす影響

注１：数値は標準化されたパス係数であり，誤差変数は省略した

注２：R^2を従属変数の右上に記す

注３：1%水準で有意（***：p<.001）なパスのみ記載した

れたことから，シャイネスが主に被受容感を媒介として社会的スキルに影響を及ぼしていることが示された．そして，シャイネスから社会的スキルへの直接効果（－.33，p<.001）においても，有意な推定値が得られた．これは，被受容感が社会的スキルに与える直接効果よりも小さい値であり，シャイネスが被受容感と被拒絶感を介して社会的スキルに与える間接効果（－.13）よりも大きな値となった．つまり，シャイネスが直接社会的スキルに直接及ぼす影響は，被受容感よりも小さいが，被受容感・被拒絶感を媒介として社会的スキルに至る影響過程よりも強いことが示された．

低群も同様に，被拒絶感から社会的スキルに至るパス（.11，*n.s.*）を除く全てのパスにおいて有意な推定値が得られた．χ^2は5%水準で有意であったが，その他の指標において，ある程度の適合度が得られた（GFI＝.97, AGFI＝.73, CFI＝.97, RMSEA＝.22）．シャイネスから被受容感への影響（－.51，p<.001），被受容感から社会的スキルへの影響（.32，p<.001），において，それぞれ有意な推定値が得られたことから，シャイネスが主に被受容感を媒介として社会的スキルに影響を及ぼしていることが示された．そして，シャイネスから社会的スキルへの直接効果（－.61，p<.001）においても，有意な推定値が得られた．これは，被受容感が社会的スキルに与える直接効果よりも大きい値であり，シャイネスが被受容感と被拒絶感を介して社会的スキルに与える間接効果（－.13）よりも大きな値となった．つまり，シャイネスが直接社会的スキルに直接及ぼす影響は，被受容感・被拒絶感に比べ最も大きく，被受容感・被拒絶感を媒介として社会的スキルに至る影響過程よりも強いことが示された．

【考察】

本研究の結果，シャイネス，被受容感・被拒絶感，社会的スキルの間にはそれぞれ関連があることが示された．被受容感および被拒絶感の高低による社会的スキルの比較において，被受容感が低い（被拒絶感が高い）者は，被受容感が高い（被拒絶感が低い）者よりも社会的スキルが低いことが示された．以上のことから，これらの関連は深いといえる．

シャイネスが被受容感と被拒絶感を媒介として社会的スキルに影響を及ぼすモデルでは，シャイネス傾向にある者は，被受容感が得られにくいと同時に被拒絶感を抱きやすく，その結果として社会的スキルを欠如させている可能性があることが示された．

1．社会的スキルの信頼性

今回の調査で社会的スキルの測定に使用した成人用ソーシャルスキル自己評定尺度は，全体的に概ね高い内的整合性が認められたものの，感情統制に関しては，当初ほとんど内的整合性が認められなかった．また，相関分析の結果，感情統制は他のスキルの因子と負の相関が認められるなど，社会的スキル全体との関係が必ずしも一貫したものではないことがわかった．これは，尺度作成時と同様の結果であり，感情統制が他の因子とは異質であるとして検討課題になっていた部分である（相川・藤田，2005）．「感情をあまり面にあらわさないでいられる」といった項目内容から，感情統制は抑制的な側面を持っており，むしろ社会的スキルとは対照的な，対人場面における消極性にも関わる因子であると考えられる．し

たがって，感情統制は，対人関係を円滑にする能力である社会的スキルとは次元の異なる内容を測定している可能性があり，このことが十分な内的整合性が得られなかった原因であると考えられる．

2. シャイネスが社会的スキルに及ぼす影響

社会的スキルの総得点および各因子の得点をシャイネスの高群と低群で比較した結果，シャイネスの高い者は，低い者よりも社会的スキルが低いことが示された．これは，相川（1998）をはじめとするこれまでのシャイネス研究の結果に沿うものである．この結果から，たとえ病態水準に満たない対人恐怖傾向であっても，その特徴が社会的スキルを欠如させ，結果として不適応に陥っている可能性があると考えられる．

感情統制に関しては，前述の通り，社会的スキル全体との関係が一貫していないために，有意な差が認められなかったと考えられる．また，シャイネスのような対人不安に関わる特性を有する者は，対人場面において消極的であるという特徴を持つため，むしろ感情をコントロールし抑制する傾向にあるということも原因として挙げられる．

3. シャイネスが被受容感・被拒絶感に及ぼす影響

被受容感および被拒絶感の総得点を，シャイネスの高群と低群で比較した結果，シャイネスの高い者は，低い者よりも被受容感が低い（被拒絶感が高い）ことが示された．つまり，シャイネス傾向にある者は，「自分は周りから受け容れられている」といった認識が少なく，「他者に疎まれている」などの心細さを感じやすいという特徴があるといえる．これは，相川（2000）の指摘にあてはめると，対人場面を回避するというシャイネスの消極的な特徴が，報酬としての被受容感を得るために経験すべき機会を失うことに繋がっているためであると考えられる．

また，相川（1995）において，シャイネス傾向にある者は，自己認知のバイアスから，「自分は相手からポジティブに見られていない」と推測しやすいとされており，被受容感と大きく関わる特徴であるといえる．しかし，相川（1995）において明らかにされた特徴は，1 対 1 での特定の場面における初対面の相手に限定されたものであった．今回の測定に使用した被受容感・被拒絶感尺度は，他者を限定しないことに配慮し，全般的で特性的な対人関係要因の測定を目的として作成されたものである（杉山・坂本，2006）．したがって，今回の結果から，シャイネスのこのような認知の特徴は，特定の対人場面だけでなく，他者を特定しない日常生活においても，比較的一貫して存在する特性的なものであると考えられる．

4. 被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響

社会的スキルの総得点を，被受容感および被拒絶感の高群と低群で比較した結果，被受容感が低い（被拒絶感が高い）者は，被受容感が高い（被拒絶感が低い）者よりも社会的スキルが低いことが分かった．また，被受容感での比較では，感情統制を除く全てのスキルにおいて有意な差が認められた．社会的スキルの自己評定得点は，実際のスキルではなく，あくまで本人の社会的スキルに対する自信を測定している可能性もあると考えると，自尊心との関わりも強い被受容感の不足は，実際の対人行動の抑制を招くだけで

なく，特に本人の社会的スキルに対する自信を欠如させることになると考えられる．

被拒絶感での比較では，解読と主張性に有意な差が認められない一方で，感情統制を含めたそれ以外のスキルにおいては有意な差が認められた．このことから，被受容感と被拒絶感は，それぞれ社会的スキルに対して異なる影響を与えている可能性がある．

被拒絶感の結果に関しては,「他人から疎まれている」という認識は,「相手とすぐにうちとける」「誰にでも気軽にあいさつをする」といった関係開始のスキルのような，自ら進んで人間関係を構築していこうとするための対人的な積極性を妨げるものであり,「相手の思っていることがわかる」という解読のスキルや,「はっきりと苦情を言う」などの主張性のスキルのような，直接対人的な積極性に関わらない能力に対しては，それほど強い影響を持たないためであると考えられる．

5. シャイネスおよび被受容感・被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響

シャイネスが被受容感と被拒絶感を媒介として社会的スキルに影響を及ぼすモデルについてパス解析を行った結果，シャイネスが被受容感を減少させ，それによって社会的スキルを欠如させている可能性が示された．この結果から，シャイネスは特に被受容感を媒介として，社会的スキルに影響を及ぼしている可能性が最も高いことが考えられる．つまり，シャイネス傾向にある者は，対人的な消極性から「自分は周りから受け容れられている」と感じにくく，そのことが対人行動をさらに抑制し，社会的スキルを欠如させていると考えられる．

また，被受容感が社会的スキルに及ぼす影響の大きさは，シャイネス高群においてはシャイネス自体の影響より強く，低群においてはシャイネス自体の影響より弱いという点で結果に差がみられた．シャイネス傾向にない群は平均以上の被受容感を持っており，上記の差から，対人関係に対し不安の少ない者は,「自分が他人からどう思われているか」ということを過剰に意識することが少なく，その認識によって対人行動が影響を受けることも少ないと推測できる．また，被受容感自体の変動も少ない可能性がある．それに対し，シャイネス傾向にある者は，他人からの評価に敏感であり，そのことによって対人行動が受ける影響も大きいのではないかと考えられる．加えて，他者評価について意識する頻度が多いことに伴い，抱いている被受容感の高低も不安定である可能性がある．したがって，シャイネス傾向の高い者において被受容感を高め安定的に保つことは，すぐに根本的な解決には至らないかもしれないが，対人行動への積極性やレパートリーを増やしていくきっかけや，その後の SST における訓練を効果的なものにするために重要な要素となり得ると考えられる．

被拒絶感が社会的スキルに及ぼす影響については，一貫した結果が得られなかった原因として，被拒絶感が社会的スキルの各因子に対して限定的に働いていた可能性があることが考えられる (Table4)．また，今回の結果では，たとえ他人からの拒絶や不安を感じて対人行動への積極性が影響を受けていても,「相手の気持ちを推し測る」ことや「言いたいことを相手に言う」ことは影響を受けず，むしろその能力においてはしっかりと能力を持

っている可能性が示唆されたといえる．

6. 総合考察

今回の結果は仮説を一部支持するものである．しかし，シャイネスが社会的スキルに直接及ぼす影響は，被受容感および被拒絶感を媒介として社会的スキルに及ぼす間接的な影響よりも，あくまでシャイネスそのものが社会的スキルに及ぼす影響の方が大きく，全ての適合度指標において必ずしも望ましい値が得られなかった点や，誤差からの影響の大きさなどが認められた．これは，シャイネス傾向にある者のスキル欠如において，被受容感と被拒絶感という認知が持つ影響力はそれほど強くなかったためであると考えられる．したがって，被受容感と被拒絶感を重要な要因として説明するには，やや不十分な影響力であると考えられる．

本研究の目的は，シャイネスと被受容感および被拒絶感が社会的スキルにどのような影響を及ぼしているのかについて検討することであった．今回の結果から，シャイネス傾向にある者は，比較的安定した被受容感の低さと被拒絶感の高さがあること，被受容感および被拒絶感が社会的スキルに影響を及ぼしていることなど，新たな関連が明らかになった．これらは深く関わり合っていると考えられる．

仮説 1 から 4 は概ね支持されたといえるが，被受容感および被拒絶感を，シャイネスのスキル欠如において大きな影響力を持つ重要な要因として説明することはできなかった．その原因として，シャイネスの影響力の強さと悪循環や，社会的スキルの尺度の妥当性，被拒絶感を中心とした社会的スキルとの関係における一貫性のなさなどが挙げられる．

認知が改善されても，シャイネスそのものが持つ根本的な対人行動への消極性を修正できなければ，大きな効果は望めないと考えられる．また，シャイネス傾向にある者は，自分の対人行動の効果について一度否定的な信念を持つと，認知やスキル欠如との間で関係が複雑化し，悪循環が起こるとされており（相川，1998），被受容感・被拒絶感との関係においても同様の現象があると考えられる．したがって，今回はシャイネスが被受容感・被拒絶感に影響を及ぼすと仮定して検討を行ったが，被受容感・被拒絶感がシャイネスに影響を及ぼしている可能性もある．

さらに，先に述べたように，社会的スキルの自己評定得点を，実際のスキルではなく本人のスキルに対する自信であると考えると，被受容感の低さや被拒絶感の高さは，本人の社会的スキルに対する自信も欠如させ，それを実行することを抑制している可能性もある．したがって，被受容感の低さや被拒絶感の高さは，実際に獲得すべきスキルを欠如させているだけでなく，特にこのような社会的スキル実行欠如をさらに高める要因にもなっていると考えられる．このような問題は，一度獲得したスキルの長期的な持続や般化といった研究課題が残っている，シャイネスのSST適用において重要であるといえる．これらのことから，被受容感を高めることで，実際の社会的スキルを獲得させるほどの影響力がない場合でも，既に獲得されたスキルの実行を促すことに繋がる可能性があると考えられる．

7. 今後の課題

今回の結果から，被受容感と被拒絶感を，シャイネスの社会的スキル欠如における重要な要因として説明することはで

きなかった．また，尺度の信頼性および妥当性，スキルの自己評定と他者評定のずれなど，社会的スキルを扱う上での問題が示された．

被受容感と被拒絶感に関して，今回の調査では他者を特定せず普遍的な条件で測定を行ったが，対象を周囲の友人や家族などに限定した場合には，その関わり方によって異なる結果が得られる可能性があると考えられる．また，シャイネスの影響を除けば，被受容感は社会的スキルにある程度の影響を及ぼしている可能性が示されたため，対象をシャイネス傾向にある者に限定しない効果の検討も重要である．

今後は，社会的スキル欠如と認知の関連について，交互作用やその他の要因も考慮に入れながら，より具体的な関係性について検討する必要がある．特に，社会的スキルの実行欠如に対して影響を及ぼしている要因を明らかにすることで，獲得したスキルを長期間継続して実行し，般化させていくための一助になるといえる．また，実験や他者評価により実際のスキルを測定し，自己評定との比較を通して，欠如の類型を正しく判別することも重要である．その判断基準を考慮し，条件ごとに効果を検討していく必要があると考えられる．

【引用文献】

相川充　1991　特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究　心理学研究，**62(3)**，149-155

栗林克匡・相川充　1995　シャイネスが対人認知に及ぼす効果　実験社会心理学研究，**35(1)**, 49-56.

相川充　1996　社会的スキルという概念　相川充・津村俊充（編）社会的スキルと対人関係－自己表現を援助する－　pp.3-21　誠信書房

相川充　1998　シャイネス低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討東京学芸大学紀要　第１部門，教育科学，**49**，39-49

相川充　2000　シャイネスの低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関するケース研究　心理学研究，**62(3)**，149-155

相川充・藤田正美　2005　成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成　東京学芸大学紀要　第１部門，教育科学，**56**,87-93

後藤学　2001　シャイネスに関する社会心理学的研究とその展望　対人社会心理学研究，**1**, 81-91

Gresham, F.M. 1988 Social skills : Conceptual and applied aspects of assessment, training, and social validation, In Witt, J.C., Elliott, S.N. & Gresham, F.M.(Eds.), *Handbook of behavior therapy in education.* New York Press. pp. 523-546.

平賀明子　2003　社会的スキル「自己報告尺度」に関する妥当性の検討一仲間からの評定と自己評定との関連　北星学園大学短期大学部北星論集，**1**，57-69.

石井佑可子　2006　社会的スキル研究の現況と課題：「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて　京都大学大学院教育学研究科紀要，**52**，347-359

厚生労働省　2007　ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する

調査研究 http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html（2012年11月28日）

工藤恵理子　2007　親密な関係におけるメタ認知バイアスー友人間の透明性の錯覚における社会的規範仮説の検討ー　実験社会心理学研究，**46(1)**, 63-77

Leary, M.R. 1986 Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W.H. Jones, J.M. Cheek, & S.R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment.* New York: Plenum Press.

菅原　健　1998　シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向　性格心理学研究，**7(1)**, 22-32

杉山崇　2002　抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究　心理臨床学研究，**19**, 598-597

杉山崇・坂本真士　2006　抑うつと対人関係要因の研究ー被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつ的自己認知過程の検討　健康心理学研究，**19(2)**, 1-10

鈴木真吾・小川俊樹　2007　自尊心と被受容感による思春期の適応理解の研究ー社会的スキルとの関連から　筑波大学心理学研究，**34**, 91-99

安井梨恵・米山直樹　2010　シャイネスに対する認知行動療法的アプローチに関する考察　人文論究，**60(1)**, 133-144

（受付日2013年10月１日）
（受理日2013年10月10日）